

私の父は蒙古軍軍医として勤務、東宮鉄男氏の要請により直ちに退官し、昭和十一年末に弥栄病院長に就任した。当時小倉さんは後統開拓団の先遣隊の訓練所の副所長の要職にあった（所長は山崎団長で義勇隊訓練所長で不在）。

小倉さんと私の父は意気投合し、よく酒を酌み交わしたという。小倉さんは終戦間近に再応召された。ソ連軍侵攻と共に家族の方々が悲惨な逃避行中、二歳の長女が亡くなられた。

小倉さんはシベリア抑留、多くの苦難を体験されたが、逆境にあっても人情中隊長であったという。

帰国後は、奥様の実家の厩舎を改造して住み、深夜まで猛勉強し、第一回の農業改良普及員の国家試験に優秀な成績で見事に合格された。勤務に精励、多くの実績をあげ、所長に栄進された。

しかし、悲しい不幸にも遭われた。昭和二十五年長男の秀敏さんが日本脳炎で急逝された。私の妹と弥栄小学校で同級生、成績抜群で級長をしていたと追憶している。その十年後に最愛の奥様が四十五歳で三人の

子供を残して逝去された。

その後良縁を得られ再婚、幼いお子さんも実の母のごとく慕い、それぞれ立派に成長し一家をなした。ご夫妻で拓魂祭、弥栄会、長野会にも参加され、すなわち「満州弥栄一家」の一員である。

現在、新築三回目的邸宅に三世代同居の円満な家庭を作られている。

小倉さんは県職員定年退職後に区長をはじめ、多くの無報酬の役職に就かれ、地域住民から絶大な信望を得ておられる。

（弥栄会会長 藤巻 禧四郎）

この海の彼方に

富山県 嶋田 きよ

私の幼少のころ、父が馬を一頭買って馬車を引いていたのを覚えています。木材・木炭その他を運ぶ仕事でした。母はたくさんの子供を育て、百姓をしています

いた。

「金鷄輝く日本の

栄えある光身につけて

今こそ祝えこの朝

紀元は二千六百年

ああ一億の胸はなる」

この歌は、当時の学校やラジオ放送で大変よく聞かれ、私たちは毎日歌っていました。

昭和十五年三月十五日、私たち一家八人が満州国浜江省寶泉大泉子福富開拓団に移民出発の日です。当時の故郷氷見郡宇波村白川の神社にお参りし、部落の方にお別れのあいさつに行きました。記念写真をとって、いよいよ出発です。母の泣き声、姉二人の泣き声のあいさつ、二人の妹の喜び回る姿、私も喜んでいる一人でした。まるでどこかへ旅行でもするかのようです。

また二歳の妹までが母の背中で「ウォーウォー」とか「チャチャ」とか、多分一緒に別れのあいさつをしているのでしよう。父は自分が決心して進む道ですから張り切っていました。

敦賀より船で朝鮮に向かいました。母が船酔いをして、私たちみんなで世話をしました。朝鮮に泊ると、今度は汽車に乗り、牡丹江まで行き、乗り換えて今度はハルビン行きです。父は自信たっぷりな表情で、「ハルビンは、日本の東京だぞ」そんな会話をしていました。およそ一昼夜ほどたったと思うころ「ハルビン、ハルビン」との声が聞こえました。ハルビンに到着しました。まるで夢のようです。ハルビン市地段街の町になると、日本人の姿があちこちに見えるようになりました。開拓会館のすぐ近くには、丸商デパートとときわデパートが二軒並んで建っています。父は私たちに一個十銭のキャラメルを買ってくれました。こんな嬉しいことは初めてです。デパートの店員はほとんど日本人のようです。父はまた「ハルビンはすごいだろう」と自慢のようでした。

一泊して、はや三月二十一日になりました。今度は福富開拓団のトラック十トン車が、私たちを迎えにきてくれました。八人の家族はトラックに乗り、真ん中に私たちが座り、荷物はその周辺にという形で、いよ

いよ第二の故郷に向かつて出発です。古びた毛布のよ
うな布切れを体にかけてました。しばらくして外をのぞ
こうとしましたが、それどころではありません。まあ
なんと、寒くて身も凍る感じですよ。走る走る、中国大
陸直線道路。およそ五時間ぐらい走ったのでしょうか。
到着したのは福富開拓団の本部です。見るものすべて
が中国という感じです。本部の幹部の方の指示を受け、
本部の仮住まいにちょっと一休みしました。夜は電気
もなく、石油を使うランプなのです。ひょうたんのよ
うな形をしたランプでした。祖国日本の富山を離れ、
第二の故郷に根をおろした私たち一家です。改めて氷
見の懐かしさが胸いっぱいに広がりました。

そして四月一日より新学期が開始です。妹は福富尋
常高等小学校四年、私は高等科一年に入学しました。
全校生徒といっても約三十人足らずです。私たち高等
科と小学五・六年生は、三木校長先生の受持ちです。
一、二、三、四年生は新しく入っていらした山田先生
の受持ちでした。これからが福富小学校の始まりなの
です。父は私と妹に大声で「ここまできたら、勉強し

て頑張るのだ」とどなるような口調で言いました。私
も頑張ろうの一心で胸がいっぱいになりました。

月日のたつのは早いもの。三カ月もアツという間に
過ぎ去ったある日、先生が「お前たち、今日はイチゴ
摘みをするから、近所のおばさんたちからバケツを借
りてきなさい」と言われ、私はびっくりしました。日
本では片手に一杯ほどしか取れないのに、バケツを持っ
て行くからです。ある友達が「先生、弁当箱はだめで
すか」と言って、先生は「そんな小さいものはだめだ」
と一言。そして借りたバケツを持って、イチゴ摘みの
山遠足です。皆は喜んで「キャッキャツ」と騒ぎまし
た。約二キロも歩いたと思うとき、イチゴの木が見え
てきました。皆が口々に騒ぎました。校長先生が「ま
だそこは少ない、もっと中に入れよ」と言うと、皆が
イチゴを見つけ「キャッキャツ」と一段と大声ではしゃ
ぎました。本当に中の方へ進めば進むほど、イチゴが
ギッシリつまって実っているのです。生まれて初めて
イチゴの原を見物しながら、大きな粒のイチゴを腹いっ
ぱい食べました。そしてバケツ一杯のイチゴをみやげ

に全員大喜びです。

次はワラビ取りです。まあなんと大きなワラビ。野原一面にぎっしりとつまって育っているのです。満州の野原に育つ植物は、本当にびっくりすることばかりでした。秋になるとほおずきとり。ほおずきは野原一面にオレンジ色のじゅうたんを敷いたようになっていました。その次は山ぶどう狩りです。日本の山ぶどうは、小さくてちよっとすっぱく感じましたが、満州の山ぶどうは大変大粒で、それがとても甘いのです。九月になると、北満は日本の冬と同じです。霜にあってぶどうの味はまた格別なので、またバケツにたくさんのみやげを入れて帰宅しました。

また山には白樺の木が一面に生い茂り、私たちは小刀を持って山に行き、皮をくりぬいて柱かけを作り、日本の友に送ってあげたこともありました。

校長先生はまた「日本と違うのだ。夏は短く冬は長い。皆頑張れよ」と言われました。遠い近いを問わず、学校は寮生活の制度にしました。そしてまき作りもたくさんしました。高等科の男子たちは、鋸のこぎりで切ったり、

鉋かんなで割ったりの大仕事です。私たちは運搬係なのです。冬、宿舎はオンドルで暖めます。縁の下の入口でまきをたくのです。すると私たちの机の下が暖かくなって、勉強も大変よくできるし、夜寝るときも布団が暖かいのです。

初めての冬がやってきました。私の家も、本部から遠く離れた朝日郷部落に永住することになりました。ここから学校まで二十キロほど離れていました。私と妹は寮生活することになり、次第に慣れて、大変楽しくなってきました。こうしているうちに、北満にもお正月がきました。

学校では、夏休みを二週間、冬休みを一カ月と定めて、私たちは初めてのお正月を迎えることになりました。八人の家族が皆、そろいました。一人一匹の冷凍の鯛が私たちのお膳を賑わしました。生まれて初めて鯛をいただきました。父はまた「日本ではいただけないんだぞ」と自慢しました。私たちは大喜びでした。そんな生活が当分続きました。

お正月も過ぎ、先生方は新しい学校の建設に一生懸

命です。早速校地も確定し、全校生は校地に基礎石を並べるお手伝いもしました。入学以来いろいろなことがあり、一年間はいつの間にか過ぎ、新しい学年を迎えました。私と妹は進級し、その下の妹は一年生に入学しました。

この年の秋の終わりに新校舎ができ、私たちは新しい寮に入りました。寮では、朝は六時起床、六時三十分には朝の点呼。寮の前庭に並び、千メートルほど離れた本部まで駆け足で行って点呼をします。すべて校長先生の指図で行われます。小学校一年生にとっては大変なことでした。途中で泣いて立っている子供も時々いるのです。頑張って乗り越えることが大事なのです。学校には日本語の少し分かる満州人のボーイが一人いました。とても物分かりの良い人でした。そして私たちも少しずつ、満州語が分かるようになってきました。

高等科二年生にも、お正月がやってきて、そろそろ就職の準備もしなければなりません。

同級生の重田絹子さん、川原ミドリさん、この二人

はハルピン市立病院付属看護婦養成所に入学しました。私は開拓団に一年とどまり、本部診療所で見習い看護婦として手伝うことになりました。病院も大変忙しい毎日でした。大陸の花嫁さんも次々と入植され、福富開拓団もマンモス部落となり、本当に嬉しいことがたくさん続きました。花嫁さんは次々と赤ちゃんを出産され、病院は出産で賑わいました。ハルピンから助産婦さん一人が入植されました。お医者さんは四国出身の、久保田貞玄先生でした。とてもすばらしい先生で赤ちゃんを大変上手にお世話してくださいました。そのとき、私も看護婦になって、早くこの社会で活躍したいなと、一心に思うようになりました。開拓団に次々入植される花嫁さん、増え続ける子供たち、本當に福富はすばらしいなと思いました。

一年のたつのは早いものです。久保田先生にはいろいろ指導を受けましたが、今度は先生のお世話で義勇軍に入ることになりました。満蒙開拓義勇隊ハルピン中央医院付属看護婦養成所です。そして昭和十八年三月二十日に入学試験を受けることができました。開拓

団の本部とも三月末でお別れました。

運命とは本当に皮肉なものです。そのころ私の実家では母が体調をくずして休養していたのですが、だんだん悪化するばかりでした。入学式は四月十日で、その前日には出発しなければなりません。しかし、母は私の出発の前の日の夜、ついに帰らぬ人になってしまいました。私は悲しみをおさえ切れなくて、涙を流しました。病院へは電報で連絡をとりました。そして一日遅れで、私一人の入学式をしていただきました。

私は姉に付き添ってもらい、あいさつに歩きました。日本内地と方々の開拓団と合わせて二十三人の同窓生がそろいました。いよいよ私も独立したのです。私はそう心で語りながら、お友達と行動を共にしました。看護婦養成所とはいえ、さすが軍国主義の訓練ですから、決して甘いものではありません。頑張ろう、何度も自分に言い聞かせる私でした。

それぞれの科に、一カ月交代で勤務を命ぜられました。規則は厳しく、まず言葉遣いに注意し、廊下を歩くとき、向こうから歩いてくる先輩には必ず立ち止まっ

て頭を下げることなど、細かく考えた行動をしなければなりません。でもまた、楽しいこともありました。それは山遠足です。ハルビンより汽車で約二時間ほど南下したところの小高い山に、おにぎりを持って登るのです。浅見外科部長の奥さんが妊娠五カ月にもかかわらず、先頭になって頂上に登る姿に皆、心打たれました。

また冬になると、ハルビンの松花江ではキリストの洗礼祭が行われます。氷を割って川の中に飛び込む信者たちの姿は、本当に生まれて初めて見る行動でした。またその松花江の真ん中で、打ち上げ花火祭もよく行われます。それこそ空いっぱいに広がる花火も、初めて見ることができました。

日曜日には、日本人町の地段街まで散歩をしました。日本軍の兵隊さんの二部合唱の行進の姿、どこからかしら聞こえる胡弓の音、やはり中国だなーと思いましたが。

一方病院では、訓練の入院患者はいつも三百人以上はいたと思います。主に肺結核患者で、本当に見るの

もかわいそうだなーと思うようなことにも何度か出会いました。

養成所では、大東亜戦争の歌も習いました。

今こそ「うて」と宣戦の

詔に尽くす つわものよ

火ぶたを切って押しわたれ

時十二月その八日

音楽の先生は耳鼻科医長の半田先生でした。バイオリンがとても上手で、いつも三日月型に並んで指導を受けました。

一方、戦争は大変深刻になってきました。夜は病室に、真っ黒のカーテンをして、外へ光をもらさないように心掛けました。病院でも大事な先生方が次々と召集令状を受け、出発なさいました。言いようのない惜別を感じることも、多々ありました。こうして頑張っている中にも、一年間は束の間です。

養成所の二年目を迎えることになりました。後輩がたくさん増えました。何となく嬉しい気持ちやら、いろいろと胸いっぱいになりました。長年お世話になっ

た川井婦長が結婚退職され、時節柄送別会もなく、ただお見送りしただけでした。早速、新しい婦長がお見えになりました。

私たちも二年生、あと半年で卒業です。もう少しの頑張りで、看護婦になれるのです。「ああよかったわ」私は胸のふくらむ思いでした。戦争もますます深刻になってきたようです。運命は天におまかせするよりほかにないと思えました。お米も配給ですので、一膳しか食べることができません。

秋になって病院では、運動会が行われました。いろいろなプログラムの中に、お手玉競争がありました。何も持たない競技なら私はすぐ負けたかもしれませんが、お手玉があるので私が一位になりました。まるでウソのようです。ほうびには、ノートと鉛と鉛筆が並んでいました。私は一番先に鉛をいただきました。前に並んでいる先生方が「やはり子供だなー」とくすくす笑われる声が聞こえました。でも私は平気でした。とても鉛がほしかったです。

遠足も過ぎ、運動会も終わり、もう残りには卒業試験

のみです。昭和二十年二月二十日が私たちの晴れの卒業式でした。一月二十日ごろより卒業試験で、日中は勤務、夜は勉強でした。お友達も皆頑張っていました。しかし二十三人中二人は、ついに肺結核で入院してしまい、卒業できない状態でした。運命の皮肉とでもいいたいくらいです。院長先生並びに教務主任の先生より力のこもった訓示を受け、私たちはめでたく卒業することにになりました。

卒業式の日、新しい勤務が命ぜられました。「昭和二十年五月一日より四年間、満州開拓青年義勇隊孫呉訓練所勤務を命ず」というものでした。

昭和二十年四月二十九日の天皇誕生日、私は婦長やお友達に見送られて、いよいよ出発することになりました。ソ連との国境地なのです。朝七時にハルビン駅から汽車に乗れば、着くのは翌日夕方六時になるのです。ホームまで婦長に送っていただき、そこで「さようなら」をしました。やはりお別れとなれば、胸にこみ上げるものがあります。でも孫呉では、院長先生をはじめお友達が皆手をのばして待っていてくださるの

です。私は夢を捨てないで喜び勇んでの旅行をしました。

汽車の中はほとんど満州人ばかりです。ふと気がつくと、日本人らしい親子家族が乗っているのです。言葉をかけてみるとやはり日本人でした。民間の孫呉開拓団へ行く移民団の一行だったのです。

当日夜中と思われるころ、今度は日本兵の一団が汽車に乗りこんできました。日本兵は大変恐ろしいです。いきなり「コラ、どけ」、このような言葉と手に持っている銃を振り回し、中国人をはらいのけました。私も思わず立ち上がり、席を譲るつもりでした。すると日本兵は優しく「いや、あなたはいいですよ。あなたは日本人でしょう」「はい、そうです」私は静かに答えました。日本兵は私の隣に座り、「こんな夜分に、どこまで行きますか」私は「ハルビンからきました。これから義勇軍孫呉訓練所に転動するのです」日本兵はびっくりしたようでした。

夜の六、七時ごろ、目的地の孫呉の駅に着きました。日本兵もその駅に全員下車したようでした。そして日

本兵と私は、お互いに住所を交換しました。私は竹の子の缶詰といわしの缶詰をたくさんもらってお別れしたのです。私は国境を守る兵隊さんたちに別れを告げ、私の生きる道を歩きました。

こうした旅も三日目を迎え、五月一日に訓練所のトラックが私を迎えにくれたのです。私を乗せたトラックは、国境の町孫呉訓練所へと大草原を飛ばしたのです。約二時間も走ったと思うときに、病院に到着しました。早速、相馬院長先生ほか先生方にごあいさつをして、訓練所長の佐々木先生に着任のごあいさつを行いました。これで翌日からいよいよ訓練所の勤務が始まるのです。

病院では、一番の若輩ですので、何事も指示を受け行動を取りました。

国境にも春の一番には野原一面に福寿草が咲きみだれ、何とも言えない驚きの地でした。みんなで相談して、中隊の巡回治療を行うことになりました。一中隊より六中隊まであり、東西南北に大変離れていました。直線道路は全部、小粒の砂利が敷かれていてとても立

派な道でした。これも日本兵が造ったのだそうです。

六月になりました。今度はケシの花、スズラン、タンポポ、鬼百合によく似た花、まあそれはそれは、何ともすてきな景色でした。言葉にならないほどのきれいな花の原っぱなのです。暇をみて、みんなでじゃが芋を植える手伝いもしました。私は何も知らず「ああ孫呉へきてよかったわ」といつも心の中でつぶやいていました。

ある日、福富開拓団の父に一通の手紙を送りました。「お父さんお元気ですか。福富へは二度と行きませんよ。帰りませんよ。でも私のことは絶対心配しないでください」父は私の文を読んで、早速お金を五十円送ってくれて、「冬は寒いから毛布を買いなさい。元気で頑張ることを祈る」との手紙でした。それが最期になるとは、だれ一人知る由もありません。

六月も終わりごろ、佐々木訓練所長が倒れたのです。熱も下がらず、皆必死に手当てをしたのですが、ついにその甲斐もなくお亡くなりになりました。一方中隊では、大根、白菜、ごぼうなど野菜はすくすく伸びて

いました。じゃが芋も大変大きくなりました。

今度は愛知中隊が全員軍需工場へ出張しました。戦争もだんだん厳しいとの話も、チラリと耳にするようになりました。

七月、八月と月日のたつのは流れる川のごとしか。昭和二十年八月九日、いつものとおりに出勤しました。

すると婦長から「皆危ないから避難しましょう。自分の荷物は一つにまとめなさい。救急カバンは一人二個持ちなさい。一時間以内にいつもの場所に集合」と命令されました。カバンには、一つは薬品、一つは注射液、道具一式を入れ、少しばかりの着替えを手に慌ただしい気持ちでトラックに乗りこみ、孫呉の駅へ行きました。日本人がこんなにくさくさと思うほど、集合していました。

戦争は一刻一刻を争っているようです。関東軍の兵隊たちも南方へ出発して、部隊は空っぽになっているのです。取りあえず、孫呉の部隊にて一夜を明かしました。そして早朝、ハルビン行きの汽車に乗ったのです。国境の町とお別れをしなくてはなりません。わず

かに残っている日本軍の命令で、第一回の疎開者として、北安街の映画館に宿をとりました。大きな映画館ですが、日本人で満員です。中国人たちも私たちの周りを、じっと見ておりました。

昭和二十年八月十五日のことです。十二時ごろになりました。そのとき皆が「天皇陛下のお言葉だわ」「ああ、戦争が終わったんだ」と口々に騒いでいます。またある人は、「そんなこと、ウソだわ、ソ連からのデマ放送だわ」などと騒いでいます。それと同時に、ソ連兵、中国人などに映画館を取り囲まれてしまいました。もうあちこちに泣き叫んでいる人がいます。夕方になりました。ソ連の戦車がどんどん街へ入ってきました。夜も昼もなく、どんどん私たちのいる映画館や、大きな建物を取り巻きました。三日たってもまだ入ってきて、北安の町をぎっしりと取り巻いてしまったのです。もう私たちは運命を天にお任せするほかありません。あんなに恐ろしい夜はありませんでした。

そして八月二十一日にまた、汽車に乗りました。孫呉の病院で荷造りした荷物は、もうどうしたのか跡形

もありません。救急カバンだけはまだ何でもそろって
いて大丈夫でした。しばらく走ったのですが、今度は
機関車を抜かれ、どこか分からない場所に置き去りに
されたのです。食物もなく、おなかをすかして泣く子
供たち、見るも無残な姿があちこちに見られるようにな
りました。生きることとは本当に大変なことだと、
つくづく感じました。

汽車は三日目になってやっと動きだしました。夜にな
っても電気のつかない汽車なのです。二時間ほど走っ
たかと思われたとき、ある駅に止まるのを見張ってい
た中国人が汽車の中に乗りこんできました。私は荷物
を自分の座っている椅子の下に隠しました。「イヤヨー、
イヤヨー、助けて！」あちらこちらに悲鳴があがしま
した。暗黒の中です。

また汽車が動きだしました。スピードを出して走っ
ています。だれかが「おい、逃げ遅れたやつがいるぞ」
と叫びました。男の人たちがその中国人のところを集
まってきて、力の限りなぐるけるなどして、汽車の窓
から投げ捨てたのです。私のすぐ側でこのようなこと

が起こり、私は気が遠くなりそうでした。

夜の九時ごろに新京にたどり着きました。夜も遅い
のでホームに一泊です。九月の中旬と言えば日本の冬
と同じで、横になるどころではありません。朝になっ
て、ある中隊長の奥さんが泣いているのに気が付きま
した。明るくなってから少し眠ったのでしょう。お乳
の下になった満一歳の女の子が窒息死したのです。相
馬先生は「残念ですが、手遅れです」の一言でした。

夜が明けたので、今度はしばらく落ち着く宿を探し
ました。ひとまず日本の学校、白菊小学校に休むこと
になりました。そして今度は孫呉訓練所の職員だけの
宿。運よく義勇隊訓練所本部長の邸宅を一軒借りて住
むことになりました。そこだけはどうかやうら危険を免れ
ることができました。

そうしているうちに、私たち看護婦全員は義勇軍の
品物を保管してある建物を、ひとまず病院として守る
ことになりました。地下室には大切な物が何でもあっ
たのです。安民病院と名付け、そこには次々と患者が
入ってきました。

戦争は伝染病をまき起こしました。チフス、コレラ、子供のジフテリア、あらゆる病気が大流行となりました。私もついに感染してしまいました。でも大事に至らず回復することができました。これも一緒にいた皆さんのお陰と感謝しております。

早いもので、新京にきてまた一年たちました。今度是中国軍隊より、日本の医師と看護婦に応援を求めました。院長先生は大変困惑した様子でしたが、戦争に負けた以上は返事をしなければなりません。私ももう一人の看護婦、先生二人が先遣隊として出発することになりました。新京より三つほど南下したところが私たちの集合場所でした。医師と看護婦が二百人ぐらいいと思われるほど、集まっていました。私は大変、心丈夫に重い、喜びさえ感じました。集合した職員は、それぞれ任務を分担されました。今度は、野戦病院を馬車で巡回するのです。中国共産党の軍隊は、なかなか人たちがばかりで、私たち一行は、心配せずに行動をとることができました。馬車で、ここには三日、次は十日、長いところでは約一カ月と、部隊を巡回して

きました。

やはり戦争はもう終わったのです。私たち一行は、日曜日には必ず、中国料理の飯店に連れて行ってもらいました。そんな楽しい日々を重ねていました。

昭和二十二年九月に、日本人の集まっている内蒙古よりチチハルへ送っていただきました。そしてその年の十月十日ごろに、懐かしい祖国に到着することができました。

私は満州で家族七人を亡くし、ただ一人残りました。現在には一人の娘に養子をもらって、なかなかな生活を送っています。

多くの友達、並びに七人の家族に、今もなお日本海のかなたをながめつつ、ひたすらに祈りを捧げてやみません。

【執筆者の横顔】

嶋田さんは田二反歩、畑少しをもらっての分家の農家に生まれ、場所は山間地。父は馬車挽きで木材などの運搬で生計、子供は嶋田さんほか六人、生活は困難

で父は満州開拓を決意した。

昭和十五年嶋田さんが十三歳、両親と姉二人、妹三人の八人家族で満州福富開拓団に入植、開拓団の生活小学校高等科一年に入学、楽しい毎日で十七年には卒業、団体本部診療所見習い看護婦として勤務。一年後には本人が志望した義勇隊ハルビン病院付属看護婦養成所に入所できた。ここで悲しいことに母は風邪がこじれて肺炎をおこし、「入所門出の前日死」。このショックは大きく迷い出たが、父や姉の励ましを受け、二カ年の課程を終えて、孫呉訓練所勤務、頑張らなくてはと、団にいる父や家族に手紙を書く。しかしこの便りが、父や姉妹との最後の別れとなったのである。

八月九日避難行動に入った。訓練所の先生方の家族らと避難を続け新京に到着した。

春になると中共軍に医師と共に徴用され、野戦病院の巡回任務となる。北満から避難する開拓団や一般民の姿を見る度に、父や姉妹の安否を脳裏に浮かべない日はなかったという。昭和二十二年十月十日、懐かしい祖国に帰ることができた。

家族の引揚げを待つ場所は生まれ育った故郷であった。実家に約二カ月世話になり、引き揚げた開拓係の家を次々と訪れ、家族の消息を尋ねたが、だれもが一樣に言うには、父は団員数人と八月十八日に自決。姉、妹、二人は数日後、反乱軍により死亡、長姉と妹一人はハルビン市内の収容所で十一月相次いで死亡したと聞かされた。このときの悲しみは、ひとしおではなく、何かの間違いであってほしいと祈りつづけた。

しかし自分の生きる道をとらねばと、高岡の日進紡績工場の看護婦として五年間勤めた。

だがいつも開拓団当時の思い出が走馬灯のようにかけ回っていた。ここで同じ開拓団員で終戦時召集され、ソ連抑留から帰還した近くに住んでいた、上出喜太郎さん（先妻は避難途中病死）と結婚した。しかし嶋田家を離籍することはできず、嶋田を名乗る条件で結婚、夫は三十八年脳梗塞で死亡。一人娘は養子を迎え、現在は親子三人で円満な家庭生活を送っている。

（富山県引揚者団体連合会

会長 砂原 外之)